

ミステリ読書案内

2023. 9. 17 発行元

第514号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近になって出版された本の中から4冊を紹介する。今回はシリーズものは二冊。シリーズもの以外の井上悠宇の『不实在探偵の推理』と山本巧次の『急行霧島』は単独特集で取り上げてもいい本だったかな…。

ホームページのトラブル

8月8日から9日にかけて、私のこのホームページ『ミステリ読書案内』が見えなくなるトラブルが発生しました。最初は、クリックすると別のサイトに誘導されるような状態だったのですが、そのうちに項目そのものが消えてしまう状態になりました。どこからか「乗っ取り」のような攻撃がなされたようがあります。現在のSNS上ではいろいろなことが起こるのだということを実感させられました。

ホームページの管理をお願いしている業者の方に連絡をして早速対処していただきました。また見られる状況に戻ってホッとしています。業者の方に感謝するとともに、短い期間ではありましたが心配をかけた皆様方に御礼を申し上げますと思います。

日頃閲覧してくださっている人数はそれほど多くはないのですが、この『ミステリ読書案内』、まだもう少しは続ける気持ちになっていますので、今後もお付き合いをいただければ有難いです。

井上悠宇『不实在探偵の推理』

6月に講談社から出た本。帯にさまざまな人達の推薦文が載っていたのでつい買ってしまった。「不实在探偵」これが本書の中心テーマ。大学生の菊理現(くくり・うつつ)にだけ見える女性の姿。黒い箱の中から現れるようだ。関係者との会話を録音して聞かせたり、取り調べの様子を伝えることによって、事件の推理を行う。ただ、「はい」「いいえ」「わからない」の三択でしか答えないので、質問をする方で考えながら犯人などを狭めていく方式を取らざるをえない。そこが捜査側としては苦しいところ。思い付きはとても良いのだが、肝心の事件の方の設定が今一つ曖昧なので、「不实在の名探偵」が有効に機能したのかどうか…。

香納諒一『絶対聖域・刑事花房京子』

7月に光文社から出た本。『刑事花房京子シリーズ』の第三作になる。警察小説のように見えながらも、花房京子の人物像に中心を置いた人情ミステリ風の作り。

関東中央刑務所のオープンデイに起きた事件。オープンデイとは、一般市民の人達に刑務所の公開を行うイベントの日のこと。この日は歌手・天童小百合の野外コンサートが企画されていて、特に人の出入りの激しい日。警視庁捜査一課の花房京子は上司の綿貫良平に誘われて見学に訪れていた。中に入ったところで所長の倉田と出会う。綿貫がかつて世話になった人物であった。やがてコンサートが途中まで進んだところで、建物裏手の焼却炉で首吊り自殺をしたように見える死体が発見された。

高里椎奈『兩宮兄弟の骨董事件簿2』

7月に角川文庫から出た本。シリーズ二作目。横浜で開いている雨宮陽人と海星兄弟を中心にした物語。弟の海星は病弱で家から出ることはできず留守番役をになっているが、特殊能力も持っている。店の本当の経営者は父親なのだが…海外に…。本書ではその父親が日本に帰ってくるのだが、ある事件の容器者になってしまう出来事も述べられることになる。骨董品を扱っているのでゴブレットや呪いの椅子などが登場。そして、雨宮兄弟を支えてくれる本木刑事も活躍する。基本はキャラクター小説なので、話が大きく展開することは少なく、益々こじんまりした内容になっていくのがちょっと残念。

山本巧次『急行霧島 それぞれの昭和』

5月にハヤカワ文庫J Aから出た本。ハヤカワ文庫からは既に『阪堺電車177号の追憶』と『留萌本線、最後の事件』と出ていて本書で三冊め。いずれも作者が得意とする「鉄道ミステリ」に真正面から取り組んだものになっている。

舞台は昭和36年。ここが重要なポイント。私は生まれてしたが、今の若い人たちにとっては遠い昔の話ということになるだろう。鹿児島発東京行きの急行「霧島」。午後3:55発。約26時間走り続けて東京まで。今の時代にこんな長時間走り続ける列車はない。物語の主人公は二十歳ちょっと前の上妻美里。母親を亡くし、戦争で生き別れになっていた父親を訪ねる旅へ。偶然向かい合わせの席に座ったのは少し年上のお嬢様風の前田靖子。C60の蒸気機関車に引かれた列車がスタートする。一緒に乗り合わせているのは傷害犯を追っての刑事…、それとは別に伝説のスリ師も乗っていて…。「それぞれの昭和」と副題にあるように、登場人物の一人一人が新たな人生に向かって進んでいく…。